

- ・協定特集 …………… (1)・(2)
- ・留学生・日本人学生行事、
地域交流事業 …………… (3)
- ・センターから …………… (4)

★ ヤンゴン大学と協定締結

秋田大学は 2014年9月19日（金）、ミャンマーのヤンゴン大学と学術交流協定を締結しました。ヤンゴン大学のキャンパスで行われた締結式では、秋田大学の澤田賢一学長とヤンゴン大学のアUNG・ドウ学長が協定書に署名し、握手を交わしました。締結式には、ヤンゴン大学の各学科長のほか、ミャンマー政府教育省、日本大使館からも参加者がおり、ミャンマー国内の多数のメディアも取材に来ていました。

ミャンマーはアジア最後の「桃源郷」とも言われ、民政移管後は世界中の大学、企業などが注目しています。金・銀・銅などの鉱物資源にも恵まれており、資源関連分野での人材育成が喫緊の課題となっています。今後は、秋田大学の国際資源学部とヤンゴン大学の地質学科が中心となり、資源を軸にした共同研究、研究者交流などを進めていきます。

ヤンゴン大学は1878年に設立されたミャンマー最古の大学で、日本の大学と協定を結ぶのは名古屋大学、東京外国語大学に続き3校目となります。ヤンゴン大学がこれまで日本を含めて外国の大学と協定を結んだのは文系の学科の交流を中心としたものでしたが、理系分野の交流を中心とした協定の締結はヤンゴン大学としては今回の秋田大学が初めてのことです。

今回の協定の締結へ向けての協議の過程では、ミャンマーの国土の中央部に新しく建設された首都のネピドーにある教育省を訪問して、教育大臣と直接交渉をするなど、これまでの協定締結では経験したことがなかった、かなり煩雑な手続きがありました。当時の教育大臣、また協議を行なったヤンゴン大学の前学長とも、かつて日本政府の国費留学生として、日本の大学で学位を取得されました。今回、秋田大学とヤンゴン大学との間で協定を締結することについて、非常に大きな期待を寄せて下さり、支援していただいたことで、協定を締結することができました。

（今井亮：Imai Akira 国際資源学部 教授）



澤田学長（右）
アUNG・ドウ学長（左）

バンコク事務所開設

秋田大学は、10月1日に北都銀行バンコク連絡事務所（タイ王国）内に「秋田大学バンコク事務所」を開設いたしました。モンゴル科学技術大学内の「秋田大学モンゴル事務所」、チュラロンコン大学地質学科内の「秋田大学・チュラロンコン大学共同研究所」に続く3番目の海外拠点となります。

タイ王国内における2か所目の拠点設置となりますが、「秋田大学・チュラロンコン大学共同研究所」が研究面に特化したものである一方、この度開設された「秋田大学バンコク事務所」は、東南アジア地域における事務的拠点として、現地との関係機関との連絡調整及び留学生獲得のための広報活動を担うこととなります。

事務所の開設に先立ち、9月21日に現地を視察しました。事務所はチュラロンコン大学から徒歩10分の距離にある高層ビルの一角に立地しております。BTS（バンコク・スカイトレイン）の駅の正面に位置していることから交通面での利

便性も高く、今後はタイを訪問した本学の教職員や学生にも気軽に利用して頂けるのではないかと思います。また、周囲には日系企業や現地法人の事務所に加え、ショッピングセンターや飲食街も近いことから、一定の広報効果が期待できます。

ここ数年では大学間協定校や留学生数の増加等も伴い、東南アジア地域の高等教育機関や関係大学との交流が今まで以上に活発になってきております。事務所の設置を通じて、現地機関との関係強化や東南アジア地域における教育研究活動の更なる促進が期待されます。

（滝川敏生：Takigawa Toshiki 国際資源学部事務部会計担当）



建物外観

フェラーラ大学と協定締結

平成26年6月30日にイタリア共和国フェラーラ大学との間に大学間連携協定が締結されました。同大学の位置するフェラーラ市は、フィレンツェ、ミラノ、ベネチアを頂点とした三角形の中心に位置する人口約13万人の街であり、ルネサンス期には文化の中心地として栄えました。同大学はフェラーラ市中心部に14世紀に設立された大学で、芸術、法学、神学における研究を中心に発達し、現在では総合大学として国内外で高評価を得ています。意外に感じられる方が多いと思いますが、イタリアは世界有数の豊富な地熱資源を有しており、1904年に世界初の地熱発電が行われました。そのため、同国は地熱利用技術において、日本と比肩しうる高い技術と豊富な経験を有しており、同分野におけるこれまでの両大学間の共同研究が本協定締結の契機となりました。今後は本協定に基づいて現在実施中の共同研究をさらに推進するとともに、他分野における研究協力、そして文理問わない学生交流も視野に入れていきます。

(藤井光 : Fujii Hikari 国際資源学部 教授)

ブカレスト大学訪問

7月15日・16日の2日間、ルーマニア・ブカレスト大学を訪問しました。15日はドミトル学長を表敬訪問し、16日はブカレスト大学150周年記念式典に出席しました。平成22年9月の協定締結以来、ブカレスト大学には毎年絶えず本学の日本人学生が派遣され、ブカレスト大学からも毎年最大3名の学生が本学に留学しており、盛んに学生交流が行われています。ブカレスト大学の日本語学科長より、ブカレスト大学は日本にある16の大学と協定を結んでいるが、留学を希望する学生の中での一番人気は秋田大学であるという嬉しい話がありました。帰国後もSNSを通じてやりとりをするなど、学生同士のつながりが強いようです。留学した学生の輪が広がることで、今後更なる学生交流の発展が期待されます。

(佐野信子 : Sano Nobuko 国際課国際企画担当)



150周年記念式典



ドミトル学長表敬訪問

嘉興学院と協定締結

10月18日、中国嘉興市嘉興学院で行われた嘉興学院100周年記念式典・祭典に出席して参りました。午前9時の式典では、引退した教員、嘉興学院に功績を残した卒業生等に対する表彰および歌唱・朗読等が行われ、夜の祭典では、来賓、在校生・教員を含む学院関係者、卒業生およびその親族等を併せ約1万人の観客が訪れました。各学科から特色のある演目発表があり、式典で流されたメイキングビデオからは、多くの学生および関係者が開催に向け時間を費やし努力した様子が覗われました。10月19日は、第10回東アジア経済文化フォーラムに出席し、本学の工学資源学研究所三島望教授から家電リサイクルの処理についての発表が行われました。

また、この度、嘉興学院長を表敬訪問し、大学間交流協定を締結いたしました。嘉興学院の学長以下、日本語学科の諸先生方の日本語・日本文化への関心は著しく高く、感服した次第であります。

今後の交流が両大学の更なる発展に繋がることを期待します。(山本文雄 : Yamamoto Fumio 国際交流センター長)



ブータン研修の報告

8月25日～9月5日の2週間、王立ブータン大学健康科学院にて看護師助産師養成教育や、保健・医療サービスの現状について研修を行いました。乳幼児や妊産婦死亡率が50年前の日本の状況にも満たないブータンでは、国を挙げて母子保健に力を入れており、その一方で医師不足への対応として医療従事者の養成が急務とされていました。学生はスタッフのように実習しており、看護師は医療行為の一部担っていました。そのため、入院患者は主に家族のケアにより療養しており、精神的な豊かさを示す国民総幸福量(GNH)を提唱しているブータンならではの温かい一面も感じられました。私たちも現地の教職員や学生たちの温かさに支えられ、無事に研修を終えることができたことに感謝いたします。

(工藤直子 : Kudo Naoko 大学院医学系研究科保健学専攻母子看護学講座 助教)

今回のブータンにおける研修が人生初の海外で心配もありましたが、親日家のブータンの方々のおもてなしとサポートがあり何事もなく過ごすことができました。私は主に医療や文化に触れることができました。医療現場では未だ首都と地域との間に医療の格差が見受けられましたが、その中でも限られた資源を用いて住民の健康が保たれており、特に母子保健に関して僻地でも最低限の乳幼児健診を実施していたので、MDGを満たそうとする国の医療を見ることができ、そして文化に関しても幸運なことに新校舎創設記念にチベット仏教におけるトップのラマ法王を拝見す

ることができました。そしてブータンにおける幸福に触れることができました。

(由良彰弘 : Yura Akihiro 医学部保健学科看護学専攻3年次)

ブータンにおける医療の現状を理解することを主な目的として2週間研修をさせていただきました。医療は技術や設備等に関して予想よりも大幅に進歩していましたが、解決すべき課題も顕著に現れていました。これらに向き合い、自分にできることは何なのか考える良い機会となりました。また、実際に訪れなければわからない土地や文化、生活習慣等を自分の目で確かめることができたため大きな刺激を受けました。今後はブータンでの学びを生かし、各々の環境に柔軟に対応し、広い視野を持った考え方で物事に取り組んでいきたいです。最後になりますが、ブータン研修に関わられたすべての方々へ感謝申し上げます。

(高橋由佳 : Takahashi Yuka 医学部保健学科看護学専攻3年次)



工藤直子 (左から2番目)



高橋由佳 (前列左から3番目)
由良彰弘 (右から2番目)

秋季新留学生 オリエンテーション・歓迎会の報告

9月25日、国際交流センターでは新留学生42名を対象に、「平成26年度秋季秋田大学外国人留学生オリエンテーション」を実施しました。キャンパスツアーの他にキャンパス生活をする上で必要な施設や手続き等についての説明が行われました。9月29日は、大学会館を会場に近隣住民を招いての歓迎会を行いました。新留学生チューターや秋田大学サークル“Borderless”の学生も参加し、有意義な交流の場となりました。

(国際課留学生交流・支援担当)

東成瀬「グローバル夢ミーティング」

8月2日から8月3日の1泊2日の日程で、東成瀬村の小中学生41名と秋田大学の留学生10名が参加し、東成瀬村主催の英語合宿が実施されました。この事業は、小中学生に、英語でコミュニケーションするという経験を通し、英語能力の向上だけではなく、異文化を持つ留学生と交流する楽しさや難しさの発見を促すことを目的としています。グループに分かれてのパークゴルフ、自国と自分の夢に関する発表、英語プレゼンテーション原稿の添削と発表指導、合宿所での食事会等は全て英語で行われました。普段触れ合うことのない小中学生との交流は、留学生にとってとても良い刺激となり、特に教員研修留学生には大変好評でした。

(国際課留学生交流・支援担当)

留学生実地見学旅行

7月5日と7月6日の1泊2日の日程で、外国人留学生19名に加え日本人チューター1名も参加し鹿角市、仙北市、大仙市への見学旅行を実施しました。1日目は、尾去沢鉱山、後生掛の火山現象を見学後、田沢湖乳頭ロッジに宿泊し美味しい山の幸と温泉を楽しみました。2日目は、たつこ像見学、角館武家屋敷を見学後、陶芸体験に挑戦しました。学生それぞれおもしろいおもしろい作品を作り、初めての陶芸体験に夢中になっていました。最後に、刈穂酒造を訪れ帰路につきました。2日間行動を共にすることによって、普段は話す機会のない学生同士の交流も深め、たいへん有意義な旅行になりました。(国際課留学生交流・支援担当)



尾去沢鉱山入り口にて集合写真

第三の故郷を見つける農家民泊

今年も仙北市西木町で、秋田地域留学生等交流推進会議主催、「公益財団法人中島記念国際交流財団助成」日本学生支援機構実施事業の農家民泊を行いました。本事業には、県内高等教育機関の留学生、日本人学生、教職員が参加しました。一度目は、10月4日・5日に農作業と農家民泊を体験し、二度目は、11月2日に餅つきや料理作りとプレゼント贈呈を行いました。農家体験初日は、皆、ごちない様子でしたが、あるとき、ふっと空気が変わり、打ち解けていく瞬間がありました。それはまるで人と人が触れ合う事によって生じた化学反応のようでした。最終日は、参加者達がずっと農家の方達との別れを惜んでいたのが印象的でした。

(市嶋典子：Ichishima Noriko 国際交流センター 准教授)



かたくり館内にて集合写真

仙北西木町で過ごした2日間は思い出もたくさん作れて、また、日本の農家生活が好きになるきっかけになってくれました。私は初めて里の灯で粟を拾い、米作りを体験し、味噌タンポの作り方を教えてもらいました。農家のみなさんの心をこめて育てた野菜やお米はとても美味しく、その上、日本の文化に触れることができました。

また、第三の故郷を見つける農家民泊に参加した他の日本人学生や留学生たちと交流できたことで友達になることができ、いろんな国の文化について知ることができたので私にとってとても有意義な一泊二日になったと思っています。

みんなで体験し、みんなで笑い、みんなで過ごした二日間はまるで家族のようでした。素敵な思い出有難うございました。

(Sambalkhundeu Delgermaa : 国際資源学部1年次)

Being one of the participants for the farm stay was indeed a great experience. Though I wasn't really good in speaking Nihongo, but it wasn't a hindrance after all to enjoy this activity. I'm very grateful enough to my host family and even to the rest of the host families for the things they taught us and of course for the sumptuous food they served.

Moreover, I got the chance to make friends and learned some of the cultures of international student participants (especially to my group mates) too. Indeed, it was an activity filled with fun, excitement and learning where unity in diversity prevailed!

Furthermore, this worthwhile experience gave me the opportunity to learn the Japanese culture in specific and I hope to experience this again!

To the host families, thank you for the kindness, sincerity, and hospitality that you have showed.

To Akita University, I am truly indebted!

(Darwin Zoilo Polido :
教育学研究科教科教育専攻
数学教育専修 研究生)



Darwin (中央)
Sambalkhundeu (右)

日本留学フェア

東京・大阪

東京：7月12日（土）池袋サンシャインシティ、大阪：7月13日（日）中之島グランキューブ大阪において開催された留学フェアに各学部教員、入試課・国際課職員が参加し、各会場のブースで東京・大阪の日本語学校に通う外国人留学生に対し秋田大学の概要説明を行いました。東京は猛暑、大阪は小雨の中、参加人数は東京：全体2,536人、対応者44人。大阪：全体1,313人、対応者29人でした。また、留学生の他にいくつかの日本語学校の教員にも立ち寄っていただき情報交換を行いました。来場した留学生の志望学部の内訳は、東京：国際資源学部14%、教育文化学部22%、医学部2%、理工学部39%、大学院16%、その他(経済学部)5%。大阪：国際資源学部24%、教育文化学部21%、医学部7%、理工学部48%、大学院10%で理工系への志望者が大多数でした。また試験に関する質問は、日本留学試験の合格ライン、TOEFL・TOEICの点数、2次試験の科目についてなどが多くありました。



(赤津光洋: Akatsu Mitsuhiro 国際課留学生交流・支援担当 主査)

インドネシア

日本留学フェア（主催：日本学生支援機構）が10月19日にジャカルタで開かれ、国際課の佐野職員と国際資源学部助教の星出が参加しました。フェア参加者はあらかじめ配布された各大学で学べる専門分野リストを頼りにブースを回っていました。本学ブースへの来訪者は40名超で、一日中ほぼ絶えることがありませんでした。授業料や奨学金制度、生活費に関する質問が多い中、学部入学希望者からは初年次から英語での聴講は可能か、入学後に日本語を学習できないか等の質問があり、日本語能力が留学への壁となっているようでした。また大学院入学希望者からは教員との連絡方法がわからないという声もあり、対策が望まれます。翌20日は、国際交流協定校であるトリサクティ大学の地質学科を訪問し、授業や研究室を見学させていただきました。この日は偶然にもジョコウィド新大統領の就任日で、大学の方が祝賀ムードの街中を車で案内してくださいました。



(星出隆志：Hoshide Takashi 国際資源学部 助教)

モンゴル

2014年10月10日から12日にかけて、モンゴルのウランバートルで開催された日本留学フェア（JICA日本センター主催）に参加しました。10日は他の参加大学とともに教育科学省や現地の大学を訪問、11日、12日は日本留学を希望する学生に向けた説明会を行いました。

モンゴルは、日本への留学者数が人口比で世界第1位の親日国です。その数字を裏付けるように、訪問した機関、大学では、日本の大学で学位をとられた方が責任ある立場についておられ、直接日本語で話をしてくださいました。また、2日間に渡って行われた留学説明会では、雪がちらつく悪天候の中、前年を上回る1,119名の学生が訪れ、各大学のブースに列を作りました。秋田大学もブースを設け、新たに設置された国際資源学部をはじめとする秋田大学の特色や、秋田での生活について映像や資料をもとに説明を行いました。家族を連れて訪れた学生も多く、日本留学に対する熱気が感じられた2日間でした。



(平田未季：Hirata Miki 国際交流センター 助教)

専任教員からひとこと

恥ずかしながら「勉強」の「勉」という漢字を大学3年の秋まで書き間違えていました。

「良造さん、『勉』の字が違いますよ」と教えてくれたのはインドネシアからの交換留学生Aさんで、私は彼女のチューターでした。彼女は1年の交換留学を終え、母国に帰りました。何回か季節の挨拶のやりとりがありましたが、その後は連絡も途切れてしまいました。今年、大学の先輩から茨城県の大洗町にあるインドネシア人コミュニティに行ってみないかと誘われ、現地で聞き取り調査などをするようになりました。調査の内容をインドネシア語から日本語に翻訳する必要がありましたが、先輩が「あ、それならいい人がいるから大丈夫」と紹介されたのが20年前の交換留学生Aさんでした。彼女はかつて留学した大学で博士号を取るべく、論文を執筆しているとのことでした。チューターのみなさん、留学生のみなさん、言い古されたことですが、ご縁を大切に。

(佐々木良造：Sasaki Ryoza 国際交流センター 助教)

■国際交流協定校情報

大学間協定（合計28ヶ国・地域：54大学等） 部局間協定（合計9ヶ国・地域：16学部等）

(2014年11月12日現在)

■秋田大学の留学生数

合計195名 学部生：84名 大学院生：52名 交換留学生・研究生等：59名

(2014年10月1日現在)